

東日本大震災と文化資源

宮城県気仙沼市小々汐地区から

The East Japan Great Earthquake and Cultural Resources :
A Case Study of Kogoshio District in Kesen-numa City, Miyagi Prefecture

小池 淳一

KOIKE Jun'ichi

- ① 本稿の課題—瓦礫から展示へ
 - ② 文化財から文化資源へ—民俗文化における適用の可能性
 - ③ 気仙沼・尾形家の歴史民俗的位置—地域文化の核としてのオオイ
 - ④ 気仙沼・尾形家の年中行事—盆と正月
- おわりに—展示における民俗表象と今後の課題

【論文要旨】

東日本大震災後の日本社会において、民俗文化がどのような意味を持ちうるのか、具体的には被災地の瓦礫のなかから民俗文化にかかわる資料を救出することはどのような意味を持ち、さらにそれらは博物館における展示においてはどのように表象されるのだろうか。こうした点について本稿では筆者自身が関わった国立歴史民俗博物館の文化財レスキューの経験や実感を通して考察する。

本稿ではそうした意識のもと、まず民俗事象を民俗文化財ではなく、表題に掲げた文化資源という概念でとらえる意義について近年の研究動向をふまえて確認する。次にその主要な対象であり、前提でもあった宮城県気仙沼市小々汐地区のオオイ（大本家）尾形家の歴史民俗的な位置づけを行う。さらに同家を舞台として伝承されてきた民俗として年中行事、特に盆と正月を取り上げ、具体的に記述する。そして最後にそうしたイエ（家）の年中行事を歴博における展示としてどのように構成したかについて述べてみたい。

【キーワード】 文化財, 民俗文化, 年中行事, 盆, 正月, 展示

①……………本稿の課題—瓦礫から展示へ

危機的な状況に瀕したときに、物事の本質や特徴があらわれる、という感覚はいささか大ざっぱであるかもしれないが、一面の真実をとらえてはいる。そうした見方からすると、2011年3月11日の東日本大震災によって日本社会や民俗文化の特質が表出した、という主張はある程度、吟味すべき点を含んでいるように思われる。本稿は危機的な状況、すなわち、東日本大震災とりわけ津波による被害をこうむった民俗事象と対峙することで、民俗研究とそこから派生する民俗表象の博物館での位置づけについて考究しようとするものである。

それは換言すると、東日本大震災後の日本社会において、民俗事象がどのような意味を持ちうるのか、先験的に民俗学という従来の学問体系を絶対視せずに考えてみたいということでもある。その作業を筆者自身関わった国立歴史民俗博物館（以下、歴博と略記）の文化財レスキューの経験や実感を通して試みたいというのが、本稿の基底にある問題関心である。

本稿ではそうした意識のもと、まず民俗事象を民俗文化財ではなく、表題に掲げた文化資源という概念でとらえる意義について近年の研究動向をふまえて確認する。こうした問題の浮上の契機となった東日本大震災に際しての歴博のいわゆる文化財レスキューの枠組みと歴博が行った作業について述べ、次にその主要な対象であり、前提でもあった宮城県気仙沼市小々汐地区のオオイ（大本家）尾形家の歴史民俗的な位置づけを確認する（なお、以下、同家をオオイと略記する）。そして同家を舞台として伝承されてきた民俗として年中行事、特に盆と正月を取り上げ、具体的に記述する。そして最後にイエ（家）の年中行事を歴博における展示としてどのように構成したか、について述べてみたい。なお本稿では次節以降、東日本大震災については煩瑣となることを避けて、震災と略記する。

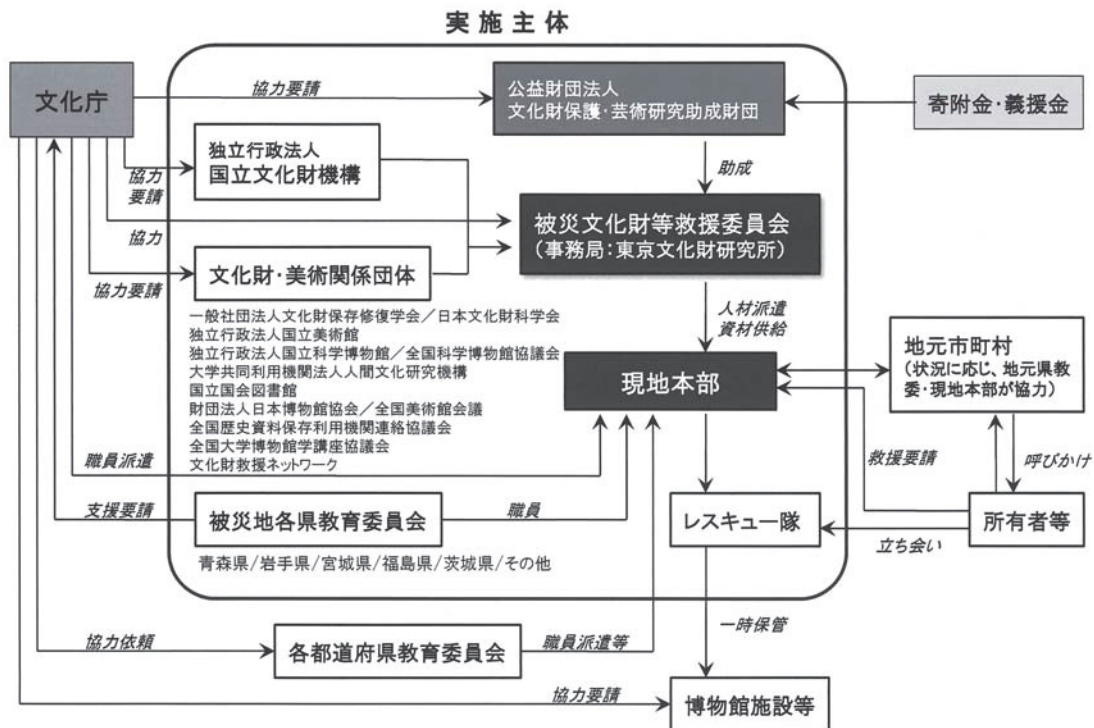
②……………文化財から文化資源へ—民俗文化における適用の可能性

（1）文化財概念の問題点—文化財レスキューをきっかけとして

震災発生後におこなわれたさまざまな民俗的な資料の救出保全活動は、一般に文化財レスキューと呼ばれた枠組みのなかで理解されることが多い。そこには被災地における貴重で価値ある文化的な財産を救うという含意があった。文化庁が設置した被災文化財等救援委員会は事務局が東京文化財研究所に置かれ、被災地に人材や資材を提供することを核にさまざまな事業を展開した（【図】東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業）。この事業と組織については種々の達成があった一方で、いくつかの問題点も指摘されている⁽¹⁾。用いられている術語に着目すれば、文化財、まさに文化的な財産の救援活動であったということができよう。

しかしここで立ち止まっておきたいのは、民俗学一般において、その対象であり、また資料となる事象は「財」なのか、どうかという点である。先験的に全ての民俗事象を文化財と呼ぶことはできないであろう。その点において文化財といっても美術品や歴史資料との違いが浮かび上がってく

東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業（文化財レスキュー事業）



(http://www.bunka.go.jp/bunkazai/tohokujiishin_kanren/pdf/bunkazai_rescue_jigyo_ver04.pdfより 2014 年 1 月 27 日最終閲覧)

るといえよう。

民俗文化財とは戦後の文化財保護法の改正のなかで浮上してきた概念であり、当初は有形の文化財のなかに民俗資料が含まれており、1954 年と 1975 年の改正によって区別され、意味づけられてきたものであった。とりわけ 1975 年の改正に際して無形民俗文化財というカテゴリーの創出によって民俗芸能のような純粋かつ客観的に保存することが困難なものまでもが対象となっていた。その背後には国民国家的な文化に対する視線とその編成を指摘することができる〔才津 1996, 菊池 1999〕。そこには民俗事象のような一定の地域のなかで普遍性を持つものの価値を積極的に認め、保存継承を図るという点で民俗学と目的において共通性があり、多くの民俗学者がそれに積極的ではないまでも賛意を示してきたといえよう。

ところが、こうした民俗文化財という概念には保護というよりも権威づけのシステムに陥っているのではないかと岩本通弥は指摘する〔岩本 1998：229〕。さらに民俗文化やそれに類似する「ふるさと文化」が政治資源として文化立国というスローガンのもとに利用されたり、観光開発の資源となっていること、戦後の文化政策のなかで民俗事象の性質の一部だけが強調されることで、ナショナリズムとも連動していくことも指摘されている〔岩本 2007〕。民俗事象が「財」とであると規定してしまうことで、民俗事象の持つ多様な性質や変容までを含んだものという学問的な認識までもが歪められる可能性があるというわけである。

このことは文化財指定とそれにとまなうさまざまな記録作成や継承環境の整備とはやや異なる次元での問題提起である。民俗事象はいくつかのレベルで、また人々の関わり方の差異のなかで単純に割り切ることの困難な意味を常に生みだしているという認識が順当なところであろう。一定の地域社会において突出して目立つ祭礼や芸能は時には文化財と目され、指定への模索がおこなわれる場合があった。同時にそれに関連する、あるいはその母体ととらえられる日常の生活や空間と融合、連続している面もある。そうした状況はどのような地域にも見られ、それが生活とか文化ときわめて大まかにとらえられるものであった⁽²⁾。そうしたものの全てが今回の震災、そして津波によって失われたのである。

(2) 小々汐の経験—レスキューの現場でのとまどいから

震災後、歴博がレスキューに取り組んだのは冒頭でふれたように気仙沼市小々汐という気仙沼湾に面した集落の大本家である尾形家であった。具体的には、かろうじて海に流出することを免れた同家の屋根組み部分とその下や周辺に散乱していた生活用具の数々を同家の御家族と共同で拾い上げ、保全する作業であった⁽³⁾。同家と小々汐地区には豊かな民俗文化が存在していたことはいうまでもないが、それはそのまま全てが民俗文化財では、もちろなかった。津波によって瓦礫の山と化したこの地区において何を救い出すのか、そしてそれにはどういう理由もしくは裏付けがあり、意義があるのか。瓦礫のなかからかつての生活の痕跡を見出そうとしていた筆者たちにとって、それは常に念頭にあった意識であった。

われわれが向き合い、救い出し、洗浄・整理しようとしているものは文化であるだろうが、一律に文化財と決めつけていいものではなかった。後述するようなオオイの年中行事の記憶がそれを考える手がかりではあったが、それに結びつくものはごく一部であった。その時に筆者の脳裏に浮かんだのが文化資源という語であり、ここでは民俗文化を一種の資源としてとらえることであった。

こうした文化を資源としてとらえる場合、その基本的な視角として欠かせないのが、誰がそうした意味づけを行うのか、という主体の問題であり、さらにどういった条件やプロセスでそれが行われるのか、という意味や目的の問題である〔山下 2007a〕。文化財と異なるのは普遍的あるいは絶対的な価値が存在するというわけではなく、特定の条件や環境のなかで、価値を見出す主体によって初めて文化は資源として扱うことができるという点である。そこでは資源として扱う側の責任や倫理が問われることになるし、資源としての価値判断が対立、葛藤や一定の条件下での序列化が行われることもある。ある人にとっての資源が、別の立場あるいは異なる条件のもとではそうではない、という場合があることを排除しないということになる⁽⁴⁾。

このことを震災とその後の文化をめぐる状況に引きつけていうならば、瓦礫は文化、特に民俗文化や生活文化の文脈において、地域史研究や民俗研究という立場からは資源であり得るということになる。そしてこれは別の立場、たとえば一日も早いライフラインの復旧を目標とする立場からは肯定されないということを受け入れるということでもある。さらに重要なのはこうした対立や異なるさまざまな立場を追認することではなく、それぞれを価値判断の根拠にまで踏み込み、止揚できる可能性を探ることであろう。瓦礫はゴミでもあってゴミではない。ゴミと判断された先には活用や意味づけは想定されていないが、ゴミではなく民俗文化資源であるととらえた場合には新しい意

味や活用の可能性が生じてくる⁽⁵⁾。

ここではそうした認識にたって、民俗文化の研究とそれに利用可能な資料の保全という目的のもとに、レスキュー事業を位置づけよう。そしてそこから得られた多様な生活用具や民具を民俗文化資源としてとらえていく可能性を主張、登録しておきたい。以下、こうした目的と立場から、被災した民俗的な文化資源をとらえていく際に有用であろう聞き書きを中心とする小々汐の民俗に関する資料の提示を行いたい。

③……………気仙沼・尾形家の歴史民俗的位置—地域文化の核としてのオオイ

本節では宮城県気仙沼市小々汐地区のオオイについての史資料を確認し、地域社会と民俗文化に同家が果たして来た役割について考えるためのデータを提示していきたい。

(1) 記録・史料から

まず、いわゆる記録・史料類から前近代におけるオオイの様相を探ってみよう。

同家は仙台藩の安永年間（1772～1781）の書出、いわゆる『安永風土記』の鹿折村の条に「小々汐屋敷」として以下のように記されている。

七代相続 小々汐屋敷

弥惣右衛門

右弥惣右衛門儀先祖加賀以前名前並代数等相知不申候弥惣右衛門先祖加賀代より御書上仕候事

先祖 加賀 二代 茂吉

三代 弥兵衛 四代 十助

五代 十右衛門 六代 十左衛門

七代 弥惣右衛門⁽⁶⁾

これによれば、書出が作成された安永9年（1780）の時点で七代を経た旧家であったことがわかる。

それから30年後の文化7年（1810）に普請が行われ、今回の震災に遭遇することとなる家屋が建てられた。この家屋については宮城県教育委員会による調査が行われている〔宮城県教育委員会編1974:65-67〕。ここでは「（小々汐集落の—引用者注）各家がこの家を中心に名子関係を結んでおり、漁村における名子遺制として珍しい例とされている。」〔前掲：65〕と述べられており、漁村における同族団の核としての社会的な意義がこの家屋に付されていたことが注意されている。

同家に伝えられてきた史料によってこの点も確認しておこう。貞享3年（1686）に小々汐屋敷の十助らが鶴ヶ浦、鍛冶ヶ浦（梶ヶ浦）、小々汐を代表して塩煮（製塩）に関わる山林の取立願を残している〔村上1984：254-255〕。詳細は不明であるものの近隣の集落を含めた地域の代表としての役割を小々汐屋敷、のちのオオイが果たしていたことが分かる。

また、はるかに時代は下るが、幕末の元治2年（1865）に記された「薬かし方覚帳」にはさふらん（サフラン）や一角丸、かんのう丸などといった薬を集落の人々に貸していたことが記されてい

る〔気仙沼市市史編さん委員会編 1995：89-91〕。おそらく富山の売薬商人かそれに類する者がもたらす置き薬を人々の要望に応じて与えていたものと推測できる。このことから、同家はまた地域における保健センター的な役割も果たしていたといえる。

さらに近代に入ると同家の尾形勇助が、水沢県から三等学校係に任じられている〔村上 1984：320〕。職務内容は未詳であるが、近代教育の黎明期において同家が地域で一定の役割を果たしたことは確実である⁽⁷⁾。

以上、文書類から分かることは甚だ断片的ではあるが、地域において、オオイと呼ばれるこの家が17世紀以前にまで遡る歴史を持ち、18世紀以降、集落における代表者を務め、医薬品の供給をおこない、さらに近代には教育に携わっていたことが判明する⁽⁸⁾。こうした地域社会における役割はその後もある程度継続していたものと思われる。その様相を次に現代の聞き書きからうかがってみよう。

(2) 聞き書きから

震災以後ではあるが、オオイの当主と家族から以下に記すような内容を確認することができた。広義の伝承であるとともにオオイをはじめとする小々汐での生活文化を示すものといえる⁽⁹⁾。

1) 先祖の伝承

尾形家は3人兄弟で気仙沼にやってきたと伝えられている。そのうち、1軒は山間部の八瀬に住み着き、もう1軒も同じく羽田に羽田神社の宮司家として定着した。そして小々汐にオオイが定着した。3つの家は特に現在は行き来してはいない。しかしかつては羽田神社の御輿は「小々汐のオオイがお迎えに行かないと出られない」と言われており、実際に御輿を迎えに小々汐の尾形家の当主（先代）が気仙沼の市街まで出かけることがあった。

小々汐の集落はかつてタクバと呼ばれる高地にあり、そこにはケヤコ塚と呼ばれる貝塚があった。今では麦畑になっており、今回の震災後の高台移転の候補地となっている。

2) 社会組織

小々汐は53軒からなり、ほとんどが尾形姓である。他の苗字は吉田、加藤、小野寺、藤井、畠山、小山、菅野の各1軒、計7軒に過ぎない。そのうち、小々汐の家々と縁戚関係にないのは1軒のみである。

オオイが小々汐の中心であるが、そのイチシンルイと呼ばれる十軒の家がある。イチベッカと呼ばれるのはニンヤ（仁屋）であり、そこから2軒のベッカ（分家）が出ている。ニイヤベッカ（テンカイチ）とカマヤである。他にシンバとそこから出たマルエイ、さらに、シンヤ、タバタケ、オクヤマがあり、オクヤマからのベッカがナワヤとタカヤシキである。この10軒のイチシンルイはオオイの家の年中行事には手伝いに来る家として認識されており、冠婚葬祭や暮れのススハキ、さらに大晦日の正月の準備などは、これらの家々の主人が果たすべき役割が決まっていた。例えばニンヤの主人は小々汐のヤマ（裏山）へ行き、松飾りに用いる松を切ってくるようになっていた。

他に小々汐には近隣組織として隣組がある。これはオオイの場合は、家の並び順に、ミナミマエ、

タケノシタ、ヤマネ、ショウヤ、ミチヤ、イリの6軒が隣組になっている。オオイではイチシンルイで用が足りないときはこの隣組に頼む、という。例えば前当主の葬儀に際しては人手が足りなかったので隣組の助けを借りた。

小々汐集落はカミ、ナカ、シモの3つの班に分かれて地区の行事の当番を務めていた。なお、集落の多くの家で祭祀に参加していたのが金比羅様だが、これは明治の頃の裁判に勝った家々で勧請したものと言われており、裁判に加わらなかった家は祭祀に参加していないという。

3) 禁忌

オオイでは元の屋敷地と伝えられるタクバに祀っている天王様にはキュウリと麦をこがしたコーセンを供えることになっている。特にキュウリはまず、天王様に供えてからでないと家の者は食べられなかった。昔、病人が出てキュウリを作らないので治してほしいと願をかけたので自家の畠では作らない。蒔かないのに自然に生えたことがあったが、その時にも病人が出たので、今でもキュウリは作らない（ただし、もらって食べるのは構わないという）。またオシラサマを祀っているで四つ足（動物）の肉と卵も食べてはいけなかったが、現当主の曾祖母の代に卵だけは「食べさせてください」と願って食べるようにした。また正月1日から15日までは肉と卵を食べてはいけなかった。16日の朝にオシラサマをしまうと食べてもよいことになっていた。

以上の聞き書きから、小々汐集落におけるオオイが、広域にわたる先祖伝承や特異な禁忌を持っていたこと、日常的な場面や年中行事において同族とされる複数の家々との緊密な協力関係のもとに生活を営んできたことが分かる。なお、こうした聞き書きによってうかがうことができる様相は概ね明治以降のものであろうと考えられる。

これらの点を勘案したとき、小々汐のオオイとそこで伝えられてきた生活文化すなわち民俗は1軒の家に閉じたものではなく、地域とゆるやかにつながり、歴史的社会的な関係性のなかで育まれ、伝えられてきたものといえるであろう。そこで営まれてきた生活は、都市部の家庭生活にみられるような個別的な面もあったに違いないが、記録や民俗学的な聞き取りからうかがえるのは地域の伝承的な生活の帰結とでも呼べる特異なものであった。いわば、1軒の家ではあるものの、この地域の生活文化を集約し特徴づけるものであった。⁽¹⁰⁾ 地域文化の核としての公的な意味があり、こうしたイエを結節点として民俗文化を考えていくことはこのことは前節で述べたレスキュー活動を実施、遂行していく根拠ともなり、その過程でも確認できたことなのであった。

④……………気仙沼・尾形家の年中行事―盆と正月

次にこうした歴史的民俗的な環境のなかで営まれてきた民俗文化を年中行事、特に盆と正月にしぼって見ていこう。ここでは震災前の時点での参与観察と聞き取りとを併せて提示していく。⁽¹¹⁾ 現代における気仙沼市の旧家における行事の記録であると同時に、行事とその細部を基点として同家に関する民俗文化史的な記憶が想起できることにも注意しておきたい。⁽¹²⁾

(1) 盆行事

1) 盆の支度

盆の買い物は8月12、13日に行う。この両日、港近くの交差点に盆マチが出る。これは近隣の農家の主婦たちが、盆に用いるさまざまな道具や供物を売るもので、今ではスーパーなどでも購入できるが、根強い人気がある。

売られる品は、盆舟（真菰、500円）、帆柱（柳、100円）、お棚もの（「山のもの」ともいう。アケビ、クリ、山ナシ、ハシバミなど。200円）、お棚饅頭（小麦を原料とし、食紅などで五色に色をつけたもの。200円）、カキダレ（盆棚の柱に飾りつける色紙。200円）、コンブ（同前。200円）、ラッツオク（13、16、30日の晩に燃やす。麻殻の端に硫黄を塗ったもの。3把で200円）、竹筒（墓での花立て。500円）、花（300円）などである。全て、山間の農家が畠や家の周りで調達して作ったものである（写真1、2）。

盆マチに店を出す人は年々少なくなっており、2010年の時点で3人だけであった。12日は9時から7時頃まで、13日は午前中で、安くしてでも売り切り、荷物をなくして帰る。



写真1 盆マチ (2010年8月13日、筆者撮影)



写真2 盆マチ (2010年8月13日、筆者撮影)

2) 盆棚作り

盆棚を作ることを「盆棚をかく」という。仏壇のあるオカミではなく、庭に面した神棚のあるナカマで庭に向けて作る。仏壇から位牌を全て移し（写真3、4）、掛軸を下げ、飾りつける。盆棚の前に机を置き、ウチシキを敷いて、供物や線香立てやロウソク立てを置く。

盆棚は高さ1880ミリ、幅1500ミリ、奥行き910ミリ程度。上段に位牌、団子、落雁、お膳などを置き、2段目には盆舟、茶碗に水を汲み、ミソハギの花の枝を添えて置く。

盆棚の奥の壁に十三仏の掛軸を下げ、前面に莫塵を垂らして、先祖供養の掛軸や観音、祖師などを描いた軸を下げる。痛んで吊るせなくなったものも多くある。2010年は11本下げた。

盆のお膳は、上段と2番目、さらに空になった仏壇にも供える。盆棚をかいた後は「お精進」といい、魚や肉などは食べない（写真5）。



写真3 盆の時期の空になった仏壇
(2010年8月13日, 筆者撮影)



写真5 盆棚
(2010年8月13日, 筆者撮影)



写真4 盆棚に移された位牌
(2010年8月13日, 筆者撮影)



写真6 ラッツオクの灯り
(2010年8月13日, 筆者撮影)

3) 迎え火

13日に屋敷の墓で稲の藁束を10束ほど燃やすことを「迎え火」といった。以前は海に火をつけた藁束を流したという。かつては麦藁であった。田を作らなくなってからやめてしまった。

また13日の夜に家の庭でラッツオクを燃やす。火を点けると1本ずつ家屋と平行に置き、さらに家から門に向けて1本ずつ置く。これを「仏さんの足元を照らす」という(写真6)。消えても気にしない。すぐに集めて、1箇所ですべて完全に燃やす。「蛇・百足にか(喰わ)れないように」と言いながら、足などにかざす。

4) 盆礼ほか

14日は午前中に(朝8時過ぎから)小々汐集落の家々の人が盆礼に来る。当主は盆棚の前で迎え、「盆前の頃はいろいろとお世話になり、ありがとうございます。只今もありがとうございます。」と挨拶する。

15日は午前中に墓参りをし、花や水の他に甘酒や団子を墓石1つ1つに供える。午後は親戚筋の家々を当主が回る（現在では母方の親戚、従兄弟を中心に13軒）。

15日の朝にはハットを作って食べる。これをセナカデハットと呼び、このハットでご先祖様が供物を背負ってあの世に持って帰るのだという。小麦粉を練って、翌朝に平たく伸ばして、90ミリ×25ミリくらいに切って茹で上げ、きな粉と砂糖をまぶす。これとのっぺい汁（豆腐、コンニャク、油揚げ、麩、椎茸、茄子、ササギ、ジャガイモ、サツマイモ、ニンジン小さく切って葛をかけて、とろみをつける）を食べる。

墓参りは3箇所行く。まず小々汐、大浦、二ノ浜、三ノ浜の4地区共同の墓地、次に小々汐の沢沿いにある古い墓、最後に屋敷地内にある古い墓の順番に回る。団子や野菜、米などを切って混ぜたオソナエモノと甘酒、水、花、線香を持っていく。オソナエモノと甘酒は器などに入れるのではなく、直接、墓石とその前に注ぎかける。3箇所全部を回るのは1時間半ほどかかる。共同墓地以外の墓は小々汐集落全体の古墓のようであり、それに参るのはオオイとしての役目のようであった。

午後にはガーゼタオルや風呂敷と御仏前（2000円）とを持って、親戚を回る。

16日には、かつてはアンコモチを作って食べた。この日は朝のうちに盆棚を片付け、位牌を仏壇に戻して、盆舟を仕立てる。盆の間の供物を蓮の葉に包み、かつては海に流したが、今では墓地で燃やしてしまう。夕方にラッツオクを燃やす。30日はミソカ盆といい、再びラッツオクを燃やすという。

(2) 正月行事

1) エビス講

エビス講の膳 12月6日が2010年のエビス講であった。恵比寿大黒に魚を用いた膳を夕方に供える。恵比寿大黒の紙札が貼ってある下に膳を二つ置く。オオイではドンコの田楽を必ず作る。

2) 年越しの支度

ススハキ かつては12月20日前後に分家の人々がオオイのススハキに参集し、仕事を分担した。この時に餅つきもしたし、松を取って来る役や豆撒きをする役などが分家ごとに決まっていた。この日に分家の長老によって尾形家や小々汐にまつわる伝説が語られることが多かった。

餅つき 27日の午前中に機械でついた。

マチの日（マチ買い） 28日午前中に、市の中心街の呉服店へ夫婦で行き、新年の挨拶回りに用いるおしぼりを12セット買う。オシラサマのオセツ（かぶせる布）もここで買う。布は72×15センチで赤っぽいものを選ぶように心がける。またお年神様のお膳用に、ご飯茶碗、汁用椀、箸を買う。かつては若水用のバケツと柄杓も買ったが今はやめている。仏壇用の花も買う。

ツメマチ 28日から30日までの間、盆マチと同じ場所に気仙沼の新城、所沢といった山間部の主婦が注連縄、松、南天などを売る店を出す。

松飾り 30日は屋外の神々に松飾りをする。裏山の山腹にあるイワクラ様（磐座様の意か。三峯様とも言う）、屋敷地内のお明神様（山の神）、元の屋敷跡と伝えられるタクバの天王様、かつての屋敷地の中の井戸の井戸神様（場所不分明）にも幣束をたてる。

31日は屋内の神々の飾りをする。縁側の柱に松と栗、水引、昆布を1箇所くくりつける。かつてはオシヌグイといい、庭に2本、木を立て、それに横に木をわたして注連縄を張った。

屋敷地内の建物にも幣束を供える。中門、車庫、石倉、木小屋、板倉、厩、便所の7箇所である。屋内にも、囲炉裏の上の屋根裏に12本（閏年は13本）、座敷の屋根裏に7本の幣束をさす。また水神様と称して裏山から引いている樋の脇にも幣束を立てる。

臼ふせ 31日に皿に生米を敷き、その上に餅に煮た小豆を搗き込んで作る小豆餅を置く。その上に臼をかぶせておく。また元旦の若水汲みに用いるバケツと柄杓をその上に置いておく。臼は4日の朝に起こす。同じ事を小正月の15日の晩にも行い、正月31日に起こす。（写真7）

3) 年神ほかの祭祀

お年神様 まっすぐな松の木の皮を剥いて先端に藁を巻き付け、箒状にしたものに紅白の幣束をさす。これをお年神様といい、座敷の隅の年神の紙札のそばにたてる。

オミダマ様 箕に餅と小豆餅を5つずつ串にさしたものの、干し柿、みかん、勝栗、布海苔を並べ、お年神様のそばに南に向けて天井から吊す。（写真8、9）

オミタマ様は家によってかなり異なる。隣村の小松家では最も新しい位牌を仏壇から箕の中に移し、餅や菓子、果物を供える。箕は仏壇の前に置き、その口は南に向ける。オオイの第一別家であるニンヤ

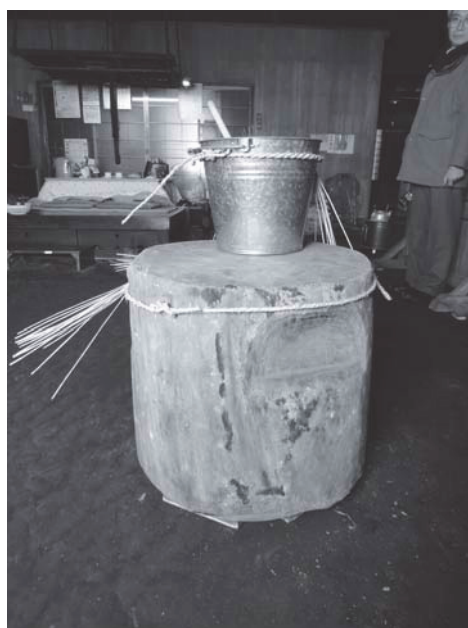


写真7 若水汲みのしたくと臼伏せ
(2010年12月31日、筆者撮影)

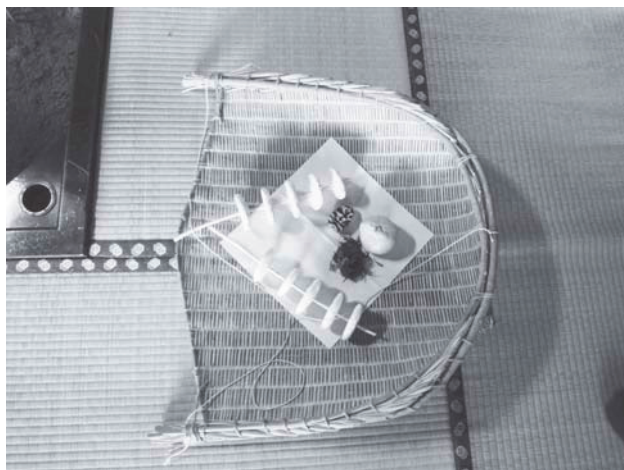


写真8 オミダマ様の中
(2010年12月31日、筆者撮影)



写真9 お年神様とオミダマ様
(2010年12月31日、筆者撮影)

(仁屋)でも仏壇の前に設えるのは同様だが、位牌は移さない。餅と小豆餅をずらして重ねて供える。オミタマ様にあげる熨斗袋は赤か黒かは迷う人が多い。正月の間は仏様でも神様だ、と言って赤い熨斗袋を用いる場合が多いようである。

オシラサマ ふだんは神棚の向かいの屋根裏に箱に入れてしまっているが、それを降ろして、オシラサマを出し、餅を供える。またロウソク、線香立ても用意する。左脇にオハネリという米を入れる鉢を置く(写真10)。オシラサマの祭祀はかつてはオオイのホトケオガミの一環であったらしく、正月16日に午前中は男性、午後は女性がオオイに集まったという。さらに3月と5月、9月のそれぞれ16日に女性のみがオシラサマ拝みをおこなっていた[竹内1959:78-80]。小山正平はこの行事を集落の男性たちの先祖(ホトケ)拝みと対比する女性たちによる祭祀と位置づけ、同族集団統御の座となっているとしている[小山1961]。

4) 新年の儀礼

若水 元日に当主が朝5時に起き、水を汲み、その水でお茶を入れ、煮炊きにもその水を用いる。

年頭の挨拶 分家の当主たちが朝8時過ぎから次々に挨拶にやってくる。当主はオテカケ(写真11)(三宝にみかん、干し柿、勝栗、布海苔、米の粉に煎った豆を混ぜて楕円形にしたものを並べてある)を脇に置いて対応する(写真12)。小々汐集落全体の新年会は10時から集会所で行われる。この時も当主は上席に座る。2日は当主が親戚の挨拶回りに出かける。主婦は家にいて挨拶を受ける。

七草 6日に草を摘み、当主が唱え言「唐土の鳥が、日本の国へ渡らぬうちに七草たた



写真10 オシラサマ
(2010年12月31日、筆者撮影)



写真11 準備中のオテカケ
(2010年12月31日、筆者撮影)

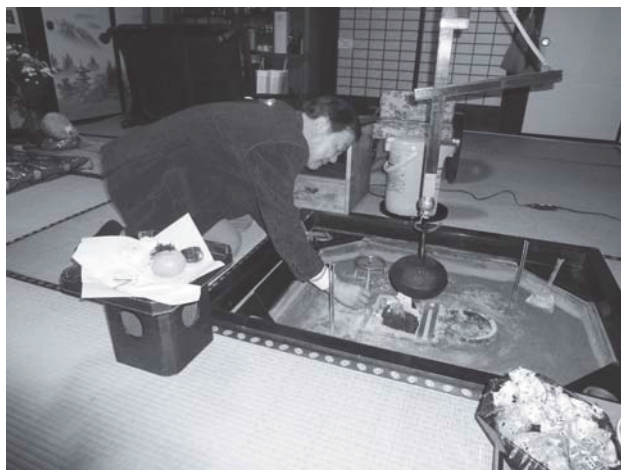


写真12 年頭の挨拶の準備
(2010年12月31日、筆者撮影)

け」と唱えながら叩いて粥を作る。

小正月 15日のうちに門松に笹とコブ(ニワトコ)の木とを結わえておく。「ささ(笹), 喜(コブ)べ」という意味だという。31日には「ウルシ」(キヅタ・木葛)と杉を結びつける。これは「うれし(漆)く過ぎ(杉)た」という意味だという(なお, [気仙沼市史編さん委員会編 1994: 194] を参照)。

以上, 細部にわたっては再調査や検証を必要とする点も少なくないが, 震災前にオオイで営まれていた盆と正月という年中行事のなかの大きな節目とその様相を提示することができたと考える。個々の行事やそれにまつわる伝承, 用具などを取り上げて民俗学的に検討することも可能であろうがここでは具体的なデータを示すにとどめた。

こうした年中行事が気仙沼市域, さらに今回の震災の被災地域において著しく珍しいものではないことはいままでもないであろう。こうした行事は戦前ならばかなり丁寧に行われていたであろうし, より詳細な関連する伝承もあったであろう。しかし, 21世紀に入った時点でこうした行事とそれを支える心意や行動規範が継承されていたことはそれなりに貴重であり, 意義深いものである。

震災後の日本社会においてこうした三陸沿岸部の年中行事の記録は, 時には人間生活に牙をむく自然の猛威を経験しても, 継続される生活の連続性の核を暗示し, 関連する民具や生活用具を救出することは, その「うつわ」を保全することであった。さまざまな民俗事象を想起し, 記憶を後世につなげていく装置ということもできよう。そうした意識のもと, 民俗文化資源的な意味としてはさまざまな差異を含みつつ, 三陸沿岸における民俗文化の地域性を構成するものとして, 尾形家の年中行事を位置づけることができるのである。

おわりに一展示における民俗表象と今後の課題

最後にこうした尾形家とその年中行事を歴博では博物館における展示としてどのように表象しようとしているか, それがどういった意図のもとに構成されているか, について述べてまとめに代えたい。

2013年3月19日に新たにオープンした歴博の総合展示第4室(民俗)では「くらしの場」というコーナーで尾形家住宅の部分的な復元展示を試みた。まず, ここでは居住空間を造作で復元し, 住宅の一部を実物大で提示し, そこで営まれている生活, とりわけ年中行事を意識してもらおうとした。仏壇や神棚, 屋根裏や座敷内に貼られた札類など通して, 単なる生活空間ではなく, 先祖や神霊とともに生活が営まれてきたという従来の民俗学の成果を, 尾形家住宅を具体例として感じ取ってもらうことを目標としている。

本稿で提示した盆や正月といった年中行事そのものを直接展示することは不可能である。ただし, その設えや装置となる仏壇や盆棚を用意することは可能で, あくまでも行事の容器としての家屋とその内部の復元という位置づけとした。空間を提示することで, 行事の実際の様相を想像してもらうことができると考えている。⁽¹³⁾

こうした展示は震災前の計画をはば実現したものであるが, 震災とそれに続くレスキュー事業を経て新たに追加された要素もある。瓦礫のなかから救出したオオイの生活用具と部材の一部を造作

のなかに組み込んだのである。パネルでもレスキュー事業を紹介し、さらに利用した部材の箇所を示すこととした。これは復元した空間を通して入館者に震災を経た展示であることを意識してもらい、かつ本稿の第3節で示したようなオオイの歴史民俗的な位置とその終焉としての震災を示そうとしたのである。

ただし終焉といってもそれは200年を経た尾形家住宅という建物の終わりであって、オオイの生活文化の歴史とその研究の終わりを意味しているわけではない。レスキューされた文化資源は地域の歴史と文化を語る資料として気仙沼市の文化財収蔵庫に収められ、整理が進められている。そして新たにそうした段階の資料に基づいてさまざまな角度からの研究が既に始まっているのである⁽¹⁴⁾。レスキュー現場においては震災前の民俗学的な聞き書きでは話題にならなかった生活用具や生活用品の発見があり、それらの記録史料との照合の可能性が見通せるようになりつつある。あるいは地震とそれに続く津波に際して小々汐地区の人々がとった行動やその理由についても地域の伝承との関わりで検討すべき点が少なくない。また集落が津波によって失われたことで、集落形成以前の様相や景観をうかがうことも可能である。これらは震災とレスキュー事業を経て、気仙沼の民俗を考えていく新たな課題といえることができる。

本稿はそうしたこれからの課題にたどりつくための概念整理と資料提示でもあった。ここを基点に新たな調査研究に取り組む必要があることを確認して綴じ目としたい。

註

(1)——この点については筆者が代表を務める大学共同利用機関法人人間文化研究機構の機構連携研究「大規模災害と広域博物館連携に関する総合的研究」(2012年～2014年度)のなかでも検討されつつある。詳細はこの共同研究の成果報告書において論じることとしたい。さしあたり、ここでの問題意識と関わる部分としては、博物館・資料館等の文化財を収蔵している施設内にその対象が絞られる傾向があったことが指摘できよう。

(2)——これらを民俗文化財としてとらえ、文化財指定することには困難が伴う。生活あるいは文化はそのまま、「財」とアブリアリに規定することはできないのである。その点では後述する文化資源という見方が求められるだろう[山下2007a, b]。そして地域の文化や生活を観光という文脈で資源化しようとする場合にも多くの困難が伴う。この点についてはグリーン・ツーリズムを論じた[青木2007]を参照されたい。特異で価値があるように見える祭礼や芸能ではなく、日常的な文脈に規定され、そのなかで伝承されてきた儀礼や行事は一律に「財」とするのは難しいし、仮にそう規定しても維持する基盤や行われる空間については祭礼や芸能のように比較的明瞭に区分したり、限定したりすることはできない。

(3)——こうしたレスキューに取り組んでいった経緯と

そこから生じる課題についてはいくつかの機会に述べている。[柴原2011], [小池・葉山2012], [小池2012b], [葉山2012, 2013, 葉山編2013], [松田2012]などを参照。

(4)——資源論の生まれてくる日本における歴史的な文脈とそこから導き出される課題については[佐藤(健)2007], [佐藤(仁)2008b]を参照。また「資源」を切り口にした社会科学の可能性については[佐藤(仁)2008a]が明晰な議論を展開している。

(5)——さらにそうした民俗研究における資源化は地域の文化や歴史研究の最前線での総合的なものである必要がある。この点については以下のように述べたことがある。「民俗学がその主要な方法としてきたものは眼前の生活をどう対象化するかという姿勢、態度であって、それは他の人文社会科学が依拠するような体系的なものではないだろう。例えば、津波によって海水に浸かり、散乱し、瓦礫として撤去されようとしているモノに対して何ができるか。我々が持っている知識や経験、技術を「丸ごと」投入し、何とか保全し、見失われつつある個々のモノの可能性を再登録するべく努めるしかないだろう。そこには民具であろうと、古文書であろうと、人間が生活のなかで作り出してきたあらゆるモノと記憶とがこれまでの秩序や体系から切り離されて横たわっている。そ

れらを「丸ごと（全部）」救うのではない。そのなかから、たった一つでも、あるいはいくつかでも救い出したモノに（対して研究者としての一引用に際しての注）知識と技能とを「丸ごと」投入するのである。」[小池 2012c: 13] レスキュー事業に対するこの基本的な考えは今でも変わっていない。

(6)——引用は[村上 1984: 57]に拠った。この史料のより詳細な分析は稿を改めて行う予定である。

(7)——同家からは近代以降、鹿折村長や同地の小学校教員などを務める人材を輩出している。この点についてはさしあたり[葉山編 2013: 38-48]を参照。

(8)——なお、オオイに伝存した漁業関係を中心とする文書については常民文化研究所が調査のために一部を借り出し、整理して目録を作成した上で返却している。この間の事情については[網野 1999: 119-131]を参照されたい。その後、『気仙沼市史』において年次が判明するもの 386 点について目録が掲載されている[気仙沼市史編さん委員会編 2003: 103-128]。

またこの地域の社会学的な調査成果としては[気仙沼市教育委員会・東北大学教育学部産業教育調査室編 1957]、[竹内 1959]、民俗学的な調査成果としては[東北歴史資料館編 1984]がある。いずれもこの集落におけるオオイの社会的な位置の重要性に言及がなされている。

(9)——以下の聞き書き記録は 2012 年 12 月の調査内容のまとめであり、さらにそれを尾形家の方々に確認してもらったものであるが、最終的な文責は筆者にある。

(10)——一軒の家を深く掘り下げ、多様な資料をさまざまな視点で分析することが民俗学的に保証されることは、個人のライフヒストリーが社会学的な分析に耐えうることと同じ構図であると考えられる。この点については[佐藤（健）1995]を参照されたい。

(11)——ここに提示したのは 2009 年から 2010 年にかけての盆と正月の多忙な時期に尾形家にお邪魔して実施した調査の内容である。内容については事実関係の誤りがないかどうかを尾形家の方々に確認していただいていることを付言する。ただし表現をはじめ最終的な文責は筆者にあることは言うまでもない。

(12)——なお、かつては多彩に行われ、またそこからオオイが包含してきた民俗的な文化をうかがうことのできる多くの他の年中行事については、聞き書きで確認はできるものの、ここでは一部を除いて積極的に取り上げなかった。ここで記述したのは参与観察とそこから遡及できるものに限ったことをお断りしておく。かつての尾形家の年中行事の様態とその民俗的な意義については

[竹内 1959]、[東北歴史資料館編 1984]、[気仙沼市市編さん委員会編 1994: 191-214]等を参照。またこの地域における民俗事象と生活全般についての考究は[川島 2012]をふまえるべきであろうし、[川島 2003]も日本全体の漁撈に関する伝承の研究書ではあるが、この地域における伝承がその基盤となっている。この点については[小池 2004]も参照されたい。

(13)——その点についてはパネルで、次のような説明を行っている。

屋内のまつり 民家は人間が生活しているだけの空間ではなく、さまざまな神や仏がいきづくところとされてきた。そうした存在は屋内の特定の空間に宿るとされたり、神棚や仏壇、幣束やしめ縄といったしつらえを通してうかがうことができる。人びとは一年のサイクルでくりかえされる行事や儀礼のたびに家屋をまつりの場としながら暮らしを積み重ねてきた。正月や盆の行事は、そうした神や仏とともに生活がいとなまれてきたことを示すものである。

尾形家の正月 12 月 20 日前後のススハキにはじまり、近隣の親戚の協力を得ながら新しい年を迎える仕度を進めていくのが尾形家の正月の特徴であった。近年では一部は市街で臨時に売られる正月飾りを用い、家族がしめ縄や幣束をそれぞれの場所に飾って新年を迎える準備をしてきた。歳神やオミタマを座敷のなかにしつらえ、新年を祝った。年が明けると親戚たちが次々と尾形家を訪れ、新年の挨拶を交わしてきた。

尾形家の盆 盆には盆マチという町場での臨時の市で必要な買い物をしてきた。盆棚には仏壇から移した先祖の位牌とともに買いととのえた品々と供物を飾りつけ、膳をしつらえた。13 日には屋敷地のなかにある墓や母屋の前の庭で火を焚き先祖を迎えた。また盆の期間は盆礼と称して親戚が尾形家を訪れる習慣もあった。16 日には盆棚を片づけ、供物をあらかじめ用意しておいた盆舟に乗せて送り出すことになっていた。

これは前節で述べてきた尾形家の年中行事のまとめの意味も持っている。研究上はいささかあっさりとした記述となっているが、展示室内で提供するにはこうした解説が適切と判断した。

(14)——その一端は[葉山編 2013]にうかがうことができる。また気仙沼の文化を意識し、担い、発信していくという姿勢で復刊された[山内監修 2012]からは尾形家を直接の対象としているわけではないが、気仙沼の生活文化の豊かさを看取することができる。

参考・引用文献

- 青木隆浩 2007「グリーン・ツーリズム政策は地域を守るか」岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館：62-83
- 網野善彦 1999『古文書返却の旅―戦後史学史の一齣―』中央公論社〔新書〕
- 岩本通弥 1998「民俗学と「民俗文化財」とのあいだ―文化財保護法における「民俗」をめぐる問題点―」『國學院雑誌』99（11）：219-231
- 2007「現代日本の文化政策とその政治資源化―「ふるさと資源」化とフォークロリズム―」山下晋司編『資源人類学 02 資源化する文化』弘文堂：239-272
- 川島秀一 2003『漁撈伝承』法政大学出版局
- 2012『津波のまちに生きて』富山房インターナショナル
- 菊地 暁 1999「民俗文化財の誕生―祝宮静と1975年文化財保護法改正をめぐる―」『歴史学研究』726：1-13,59
- 気仙沼市教育委員会・東北大学教育学部産業教育調査室編 1957『漁村と青年―宮城県気仙沼市鹿折四ヶ濱部落調査報告―』気仙沼市教育委員会
- 気仙沼市市史編さん委員会編 1994『気仙沼市史Ⅶ 民俗・宗教編』気仙沼市
- 1995『気仙沼市史Ⅷ 資料編』気仙沼市
- 2003『気仙沼市史補遺編 考古・古文書等資料』気仙沼市
- 小池淳一 2004「書評・川島秀一著『漁撈伝承』」『青森県の民俗』4：132-137
- 2012a「文化財未満!?―民家からのレスキューをめぐる―」『人間文化研究情報資源共有化研究会報告集』3：5-9
- 2012b「国立歴史民俗博物館における東日本大震災の支援活動と今後の課題」日高真吾編『記憶をつなぐ―津波被害と文化遺産―』国立民族学博物館：95-102
- 2012c「一軒の民家から―民俗学から地域史への提言―」『震災から20ヶ月―民俗学に今何ができるのか(第29回東北地方民俗学合同研究会資料集)』岩手民俗の会：12-13
- 小池淳一・葉山茂 2012「宮城県気仙沼市小々汐地区における民家からの民具・生活用具の救出活動」国立歴史民俗博物館編『被災地の博物館に聞く』吉川弘文館
- 小山正平 1961「本家の仏拝みとオシラ拝み―気仙沼市小々汐―」『社会と伝承』5（1）：40-41
- 才津祐美子 1996「「民俗文化財」創出のディスコース」『待兼山論叢』30（日本学篇）：47-62
- 佐藤健二 1995「ライフヒストリー研究の位相」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂：13-41
- 2007「文化資源学の構想と課題」山下晋司編『資源人類学 02 資源化する文化』弘文堂：27-59
- 佐藤 仁 2008a「今、なぜ「資源分配」か」佐藤仁編『資源を見る眼―現場からの分配論―』東信堂：3-31
- 2008b「人々の資源論」前史―日本の資源政策と「統合」―佐藤仁編『人々の資源論―開発と環境の統合に向けて―』明石書店：14-38
- 柴原聡子 2011「地域の蔵がなくなる 被災地の文化財の現在」『建築雑誌』1626：48-51
- 竹内利美 1959『漁村と新生活―気仙沼湾地区基礎調査―』気仙沼市教育委員会
- 東北歴史資料館編 1984『三陸沿岸の漁村と漁業習俗（上巻）』東北歴史資料館
- 葉山 茂 2012「東日本大震災にともなう国立歴史民俗博物館の被災文化財救援活動」『日本民俗学』270：225-231
- 2013a「被災地で考えたこと」『口承文芸研究』36：140-160
- 2013b「モノの救出から物語の救出への展開―気仙沼市小々汐・尾形家住宅における活動を事例に―」葉山茂編『東日本大震災と気仙沼の生活文化』国立歴史民俗博物館：64-71
- 葉山 茂編 2013『東日本大震災と気仙沼の生活文化』国立歴史民俗博物館
- 松田睦彦 2012「博物館未収蔵資料をめぐる覚書―東日本大震災にともなう文化財レスキューの反省から―」『神・人・自然』2：56-67
- 宮城県教育委員会 1974『宮城の古民家―宮城県民家緊急調査報告書―』宮城県教育委員会
- 村上森城 1984『鹿折村新風土記』自刊
- 山内宏泰監修 2012『【2012 復刻版】まるかじり気仙沼ガイドブッケー気仙沼の食・文化・歴史・観光―』スローフード気仙沼
- 山下晋司 2007a「文化という資源」内堀基光編『資源人類学 01 資源と人間』弘文堂：47-74
- 2007b「序―資源化する文化」山下晋司編『資源人類学 02 資源化する文化』弘文堂：13-24
-

【謝辞】 本稿はまず、小々汐オオイ尾形家の皆様の特段の御理解と御協力の賜物であることを明記し、文末ながら厚く御礼を申し上げたい。また震災以降のレスキュー活動をともにしてきた葉山茂氏をはじめとする同僚諸氏の御協力によるところも大であることも改めて確認し、謝意を表したい。さらに尾形家と筆者とを結びつけてくれ、震災以降もさまざまな点で御指導、御教示をいただいている川島秀一氏にも御礼申し上げたい。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2013年5月23日受付, 2013年9月18日審査終了)

The East Japan Great Earthquake and Cultural Resources : A Case Study of Kogoshio District in Kesen-numa City, Miyagi Prefecture

KOIKE Jun'ichi

What significance can folk culture have in the Japanese society after the East Japan Great Earthquake? More specifically, what does it mean if materials related to folk culture are retrieved from debris after the catastrophe? Furthermore, how are they described when exhibited at museums? This paper examines these questions through the author's experience and understanding of the cultural asset rescue performed by the National Museum of Japanese History (hereinafter abbreviated as "Rekihaku").

Based on this awareness, the article first confirms what it means to regard the folk phenomena as cultural resources, not as folk cultural assets, by tracing the latest developments of relevant research. Then, the article clarifies the historical position of the Ogata residence, called as "Ōi" meaning the overall head family, in Kogoshio district, Kesen-numa City, Miyagi Prefecture, for it was the main target and reason of the rescue activity. Regular annual events handed down by people of the residence, such as the Bon and New Year festivals, are specifically described in the paper. In conclusion, it depicts how these family annual events were exhibited at the Rekihaku.

key word: Cultural assets, folk culture, regular annual events, Bon festival, New Year festival, exhibition